
友達？

柴犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達？

【Nコード】

N1436J

【作者名】

柴犬

【あらすじ】

「頼むよ。友達だろ？違うのか？」

「昔は友達だったよ。お前が変わるまではな！」

「変わったのは君なんだよ。君が変わったんだ」

本文より

「友達つて素敵なものだな」

その男は言った。僕を見下ろしながら、僕の手を踏みつけながら。

「だからこそ残酷なものだよな？」

しやがみ込み僕の顔を覗き込みながらたずねた。僕は答えない。

「俺は認めたくないんだよ。俺みたいな男の友達が、目の前で情けなく死にかけていることを」

僕は睨みつけることしかしない。

「なあ、俺達は友達だろう？友情があるなら話してくれよ。俺だつてこんな事はしたくないんだ」

そう言いながらナイフを取りだした。

「友情で話そうぜ。恐怖で話すと後味が悪い」

「……」

「何とか言えよ」

「黙れよ」

男の表情が変わった。鬼の形相というのはこういうものなのか。し

かし怖じ気づかせることのできる表情では無い。

「黙れと言ったんだよ。僕の友情は100%お前に注いでるわけじゃないんだ！別の友達も僕にはいるんだよ！」

男からため息がもれる。

「俺が話して欲しいことは、話して困る奴はいない話だと思っていたが……。思い違いか？」

もう一度ため息がもれた。

「頼むよ。友達だろ？違うのか？」

「昔は友達だったよ。お前が変わるまではな！」

「変わったのは君なんだよ。君が変わったんだ」

男はナイフを僕の首筋に近づけた。

「後5分考えさせてあげるよ。その間にどうするか決めな」

男は僕の目の前に座り込んだ。

広い倉庫の中を男の腕時計の音だけが満たしている。

とても長い時間沈黙していた気がする。でもまだ5分も経っていないはずだ。

「……5分経ったぞ。どうする？」

「話すよ。でもその前にタバコをくれないか？」

男は黙ってタバコとライターを取り出した。そして僕にくわえさせて、火をつけた。

吸い終わるまで男は時計を見続けていた。

「6分34秒だ」

僕がタバコを吸い終わり、地面に捨てたところで男は言った。

「やっぱり変わったのはお前だよ。昔はそんなに時間に厳しくは無かった」

「いいや、俺は変わっていないよ。高校時代に君が気づかなかっただけさ」

「昔は良かったよな。僕らで楽しんだ。悪いことしたりもした。でも何よりお前が優しかった」

「何の話をしている？そこから始めないといけない話では無いだろう？」

男がまたため息をつく。

「だってお前が聞きたいのは、僕ら3人組のなかの残り1人のことじゃないのか？」

「俺にも分かっていることを話しても意味が無い！と言っているん

だ！それに俺が聞きたいのとそれとは微妙にずれている」

ナイフの刃を僕の首筋にまた近づけた。

「時間は無限にある物では無いんだ！」

「今無くなる物でも無いはずだ！」

男が舌打ちを打つ。

「分かったよ。好きに話しな」

「優しくしたお前は、あいつも助けたよな。いじめられてた僕らの仲間も」

男はタバコを取り出し、吸い始めた。口に含んだ煙を吐き出すと真上を見上げた。

「……」

「続きはどうした？」

その姿勢のまま、男は言った。興味など一欠片も無いような素振りで。

「でもお前はあいつを救いきれなかった。間に合わなかった」

「……」

「だからお前は復讐を始めた。そして大半の奴を始末した。そのた

めにお前は危ない橋を渡る仕事に就いた。そしてこうして僕を脅している」

一息つく。

「しかしお前は満足しなかった。何故かは説明するまでもないよな。お前の気持ちだから、自分で把握しているだろう?」

「俺が満足しなかったのは気持ちはどうこつじゃなく、そういう状況だったからだ」

男はタバコをかかとで踏んで消した。

「まあそうかもしれない。奴らは決まって「頼まれてやった」と言っただもんな」

「そうだ、その通りだ。しかし何故君がそれを知っているんだ?」

気づかなかったが、男はずっと僕を睨んでいたようだ。

「知りたいのか?後悔すると思うが……」

「君が逆らえる状況に見えるか?」

男はため息とともにナイフをまた僕に近づけた。

「分かったよ。言わせてもらおうよ」

今度は僕がため息をつく。

「僕だったんだよ」

「どういう事だ？まさか！そうか、そうだったのか……」

「そうだよ、僕が頼んだんだ。」

男は驚きを隠せずにいる。

「何故なんだ？君は俺らの友達だったんじゃないのか？」

「知らなかったのか？僕はずっとお前に嫉妬していたんだよ！お前の能力、人望、社交性、全てにだ！そしてお前の弱点、欠点を見つけてようとお前と友達になったんだ。気休めの為にな！」

男の表情からは怒りでは無く、悲しみがあふれている。

「だが、お前に欠点は無かった。僕が見る限りはな！だから僕はどんどん追い詰められた！」

「だからって何故？あいつをいじめなければならなかった？」

「待てよ。焦るな。僕の話最後まで聞けよ！」

男の手は震えているようだ。

「僕は自分の精神を安定させるために、お前にダメージを与えようとした。しかし直接やっては僕が反感を買っただけだ。だから一番弱いあいつを狙ったんだ」

僕はまたため息をつく。

「目論見はおおかた成功した。あの頃少しずつお前の周りから人が減っていっただろう？そういう噂も流したからね」

僕は笑った。おそらくかなり下品な笑い方だっただろう。

「一つめの失敗は少しやりすぎたことだ。あいつが自殺までするのはね。お前の助けは間に合わなかったんだよ。そしてそこから二つめの失敗ができた。お前が復讐をするのも計算外だったよ」

「当然だ！友達をみすみす殺されたのに黙っているか！」

「やっぱり変わったのはお前だったんだ。お前は昔は優しかった」

「君は昔からそんな奴だったんだな？」

沈黙が辺りを支配する。確実に5分は沈黙が続いた。

「ああ、僕はそうだったよ。」

「……、君は一度裏切られる気持ちを知った方がいいよ」

「お前は追いつけない奴がいる悔しさを知れよ！」

「もういいよ。もう全てが分かった」

「じゃあもう帰っても良いかな？早くこの縄をほどいてくれよ」

僕は両腕を男の方へ差し出す。

「もう…全てが…終わるんだ……。やっと…殺すべき奴を…見つけたんだ」

男がブツブツ言いながら、ナイフをこちらに向けた。

「そっだ…、こいつなんだ……。あいつを殺したのは……」

「おい！何だ！」

男の目は虚ろになり、手の震えもかなり大きくなっている。

「殺すんだ…、あいつのために……」

ナイフが振り上げられる。そして当然振り下ろされた。

「うわあ！」

「消えるよ……、さっさと消える！」

幸い肩をかすめただけだったが、やはり痛い。男の精神はぶっ壊れたのかもしれない。

「こいつを殺さなきゃ……。あいつのために…、必ず」

ナイフを引いた。これは切る前の準備態勢ではない。おそらく刺すためだ。

「死ねえ！」

叫び声とともに、男が迫ってくる。とっさに身をかわそうとするが

両手が使えないのはかなり厳しい。

「死ね！死ね！死ね！」

男は執拗に何度もナイフを刺してくる。1度目を避けられなかった僕は、もはやサンドバッグ同然だろう。意識が薄れていく。死に近づいていくのを強く、とても強く感じる。

男の叫び声はまだ聞こえる。聞こえることがまだ生きていることを実感できる唯一の手段だ。

「……でも友達だったんだよ……」

声になったのかは分からないが、僕の最後の言葉だろう。聞いてくれたならいいのだが……。

「分かってたよ。だから許せないんだ。君を！」

最後の会話にふさわしいのではないだろうか？

意識は深い闇に引きずり込まれる。死とはこういう物なのか？眠りと同じように感じる。あの気怠さは同じだ。

「だから許せなかったのか……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1436j/>

友達？

2011年10月6日11時28分発行